労働を詠む

機関誌『Meihoku』1500号発行 記念特集

歌集『人定（じんてい）』（田中徹尾著）を中心とする名北労基短歌対談――中

対談者

語る人　田中哲夫氏（名古屋北労働基準監督署長）
号　田中徹尾

聞く人　石田幹夫（一般社団法人名北労働基準協会特別顧問）
号　石田みきお

石田みきお　俳句は17文字、短歌は31文字、これは世界に類をみない、そして世界に誇る短詩型文学で私に俳句、短歌それぞれ一句選べと言われましたら、まず俳句では次の一句を選びます。

菜の花や月は東に日は西に　　与謝無村

限りなく黄金を敷き延べるように咲きあふれる一面の菜の花畑を―月は東に日は西に―大自然をも歌った天明の大俳人の17文字には、どんな長編小説をも圧倒する力量感があふれていると感じます。

また、短歌では

ゆく秋の大和の国の薬師寺の塔の上なるひとひらの雲　　佐佐木信綱

昭和12年に文化勲章を受章した万葉学者佐佐木信綱の代表作の一つで、自筆の碑が薬師寺五重塔の傍に建っております。

晩秋の大和、薬師寺の塔の上の白い雲、ただそれだけであるが、行き過ぎし奈良の都の歴史が内蔵された輝きを感じます。

ここで歌集『人定』に入りたいと思います。

私が好きな五首を選ばせていただきました。

徹尾さんから解説とともに短歌を作る手法、心構えなどについてお話をいただければ幸いであります。

透明な会議に倦みたり三月の窓の岐阜城かすみの中に

依頼受け安全査察をする現場我が右向けば皆も右向く

「送検」と決裁くだり直立す百合の香のする署長室にて

血痕の残りし現場に置かれたる花束をどけ証拠を写す

ずい道に入れば広がる闇の音労災死者の碑のある挟間

ほかに「鬼ころし飲める居酒屋柳ケ瀬の弥八地蔵を曲がりて左」「やさしさを人に売るのは自らを守る臆病、紫陽花の花」などについても、お話をいただければ幸いであります。特に「鬼ころし」の歌は他のお酒の名前ではいけません。「鬼ころし」でこそ凄味が迫ってきます。

短歌を作る手法、心構え

田中徹尾　あまり深くはありませんが私も俳句を嗜みます。俳句は「切れ」と「省略」に技術と修練が必要なので、短歌モードを阻害しないように、今はあまり詠みませんが、句が出来、それがはまった時の爽快感はたまらないですね。

紹介のありました蕪村の句は、絵画的です。掲出の句は、万葉集の

東（ひんがし）の野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ　　（巻一・48）

を連想させます。「東の空に朝日が昇ってきたのを見たが、振り返ると月は地平に沈みつつあった」という意味です。場面はよく似ています。

俳句では、私は4T4Sの句がいいと思います。私の好きな句の傾向は、短歌と同じ人事系の作品です。

第二芸術論が出された昭和21年、反論を実証するためにさまざまな試みがなされました。第二芸

術論は簡単に言うと、「俳句は深いことを描写できない。したがって芸術としては二流だ」、というものです。

　しかし、それより10年も前に、4Tの一人である三橋鷹女が

この樹登らば鬼女となるべし夕紅葉

（昭和11年）

　という句を出されたことに驚きを覚えます。今では、第二芸術論提案者の桑原武雄に俳句の鑑賞能力が十分にはなかったのではないかと、理解されていますが、自信を無くしてしまった当時の日本を象徴する出来事でした。戦後直後の俳壇は、明治維新直後の廃仏毀釈に似ていたのですね。

　ところで、私の「短歌といえばこの一首」といえば、

野に捨てた黒い手袋も起きあがり指指に黄な花咲かせだす

斉藤史（昭和15年）

です。

　この歌は、短歌鑑賞能力テストの歌だと理解しています。この歌を読んで、イメージや映像が立ち上がった人は短詩型文学の理解鑑賞ができる人です。何のことかわからない人は、詩とは縁のない方だと分類されるそうです。

　ちなみに、掲出していただいた佐佐木信綱の歌はまさに110年の歴史を誇る短歌結社・「心の花」の代表歌です。この歌を確かめに、私も薬師寺を訪れました。短歌の歴史を感じました。信綱の歌碑の近くに同じく歌人の会津八一の歌碑があります。

（写真）右上:薬師寺西塔、左上:相輪上部（中央が水煙）、下:水煙に透かし彫りされている飛天

すゐえんのあまつおとめがころもでのひまにもすめるあきのそらかな

　日本文化の故郷は、やはり奈良なのだと思います。古刹に歌碑を建立するというのは、当時は斬新なアイデアだったそうです。

　大きな景色から徐々に小さいものへ視線を移し、最後に場面転換をするという技法は後代の歌人に影響を与えました。ちょうど、第二歌集『新月』を出した時期ですので、歌風を変えた時期に当たります。当時の信綱は40歳でした。5歳で万葉集をそらんじ、13歳で東京帝国大学に入学し、17歳で卒業、31歳で東京帝国大学の講師を務めます。天才の名をほしいままにした信綱です。晩年は、日本の文化人のオピニオンリーダーでした。

　日本の敗戦を玉音放送よりも先に新聞社から知らされて、翌日の記事のために日本人の代表として、終戦を迎えるための意見を書いたというのはあまり知られていない逸話です。

　私は、毎年、信綱の命日である12月2日に、鈴鹿石薬師の佐佐木信綱記念館で開催される信綱顕彰会に参加しますが、晩秋でも『夏は来ぬ』を歌い、業績を讃えます。

　さて、拙歌集『人定』について、とりあげていただいてありがとうございます。引用していただいた歌は、ほとんどが仕事の歌です。当時は、このような歌風でした。

　この中でも、特に思い入れがあるのが、

ずい道に入れば広がる闇の音労災死者の碑のある狭間

です。昭和57年、当時岐阜署に勤務をしていました。東海北陸自動車道の建設が始まったころです。そのトンネル工事現場で、玉掛けの荷が腹部に当たり、痛みを我慢していた作業者が翌日他界してしまいました。災害調査を担当したのですが、遺族と面会する機会を得ました。その人は、東北高校のエースでしたが、巨人入団後は二軍でした。

　父親が亡くなってからの彼は目覚ましい活躍で、今でいう中継ぎのエースとして大活躍、のちに南海ホークスに移籍し、数年後に肩を壊して引退しました。

　そのトンネルには、今でも労災死者の碑がひそやかに建てられています。そこを通るたびに30年前の出来事を思い出します。

（次号につづく）

タイトル・浅井健史